機関が取り組む共同研究から見える産学官連携（第1報）
～北見工業大学における15年間の共同研究データ解析～

○ 鞘師　守（北見工業大学 社会連携推進センター）
内島典子（北見工業大学 社会連携推進センター）

1. はじめに

共同研究の推進をはじめとする産学官連携活動の重要性が認識され、広く社会で活動が活発に進められるようになってから久しい。自らが行ってきた活動を評価し、将来に向けた活動の見直しや改善を目指す試みも数多く見られるようになった[1]。しかし、産学官連携活動そのものあるいはその体制や運営など、活動の質的な水準を評価することは必ずしも一般的ではない[2]。筆者らは、重要と考えられるそれら産学官連携活動の質的な評価にあたり、北見工業大学でこれまで継続的に実施している共同研究パートナへのアンケート調査[3-5]結果の活用を検討している。本報告ではその手法と結果の解析例について述べる。

2. 方法

1）アンケート調査[3-5]概要　本調査は平成8年度から22年度までの15年間に行われた全共同研究を対象としている。期間を5年ごとの三つに区切り、これまでに3回の調査を行った。それら調査の概要を表1.に示す。学外のパートナに対し共同研究のきっかけ、研究成果と大学の研究・事務対応に関する満足度、共同研究後の成果活用の状況などを聞くとともに、自由記述によるコメントを得た。

2）解析・報告の体制　活動の評価を客観的なものとするため、データの解析、評価、報告は外部機関に委託した。

表1.アンケート調査の概要

		第一回調査	第二回調査	第三回調査
対象期間		H. 8－12年度	H. 13－17年度	H. 18－22年度
対象研究数		210件／5年	398件／5年	448件／5年
調査	時期	H. 13年	H. 18年	H. 24年
	回答者	パートナ／学内研究者		
評価・解析		外部組織・機関		
報告書刊行		H. 14年2月	H. 19年3月	H. 25年3月

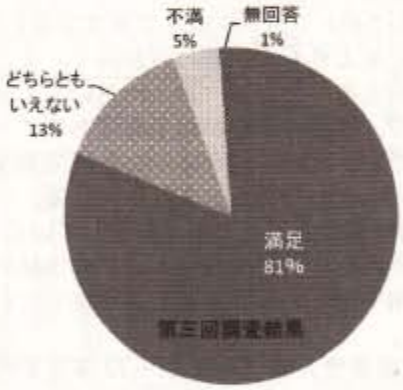

図1.共同研究成果に対する満足度

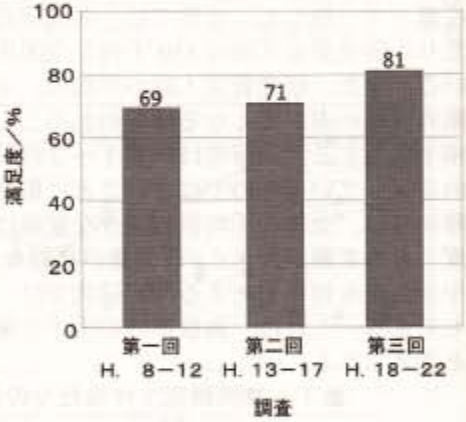

図2.共同研究成果に対する満足度の推移

3. 結果と考察

1）第三回調査結果の解析例（図1.）　筆者らが重要視している共同研究成果に対するパートナの満足度の調査では、「満足」とする回答が8割を超えていた。一方、割合は少ないものの「不満」とする回答も無視できない5%あがってきており、自由記述の回答とともに今後の活動の見直しに供すべき有効な情報になるものと考えている。

2）過去3回の調査結果の総合的な解析例（図2.）　共同研究成果への満足度はこの15年間で着実に向上してきている。産学官連携活動の最も重要な成果であると考えている連携関係強化[2]の代用指標として、「大学との連携活動への満足度」に関するデータの活用を検討している。それら解析結果の活動への反映は、今後のさらなる連携関係強化につながるものと考えている。

1)例えば，鞘師守，内島典子，月山嵩太：「北見工業大学における産学官連携活動と広報の量的な対応の解析」，産学連携学会第10回大会講演予稿集(2012)
2)内島典子：「産学連携の現状に対する課題認識―勤続の長い若手従事者の立場から―」，産学連携学 Vol.9(2012)，No.1，27.
3)株式会社北海道二十一世紀総合研究所：「実績に基づく北見工業大学有用技術マップ作成に関する調査」報告書，2003.
4)株式会社北海道二十一世紀総合研究所：「実績に基づく北見工業大学有用技術マップ作成に関する調査」報告書，2007.
5)北見工業大学共同研究に関する外部評価ワーキンググループ：「実績に基づく北見工業大学社会連携推進センターの活動に関する調査」報告書，2013.